クロス

三八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス

【Ｎコード】

Ｎ１７４０Ｄ

【作者名】

三八

【あらすじ】

特殊なチカラを持った少年の物語。

VOL．1　交鎖点

暗い暗い闇と目が眩む程の光
この２つが交鎖（こうさ）したとき彼は生まれた。
生まれた彼は身体（からだ）を求めて動き出す。
闇と光が瞬く中、探し続けた。
永遠と言えるほど探して見つけた交鎖点。
彼はその瞬間人間になった。

この世の全ての希望を集めたような白い世界。
この世の全ての憎悪を集めたような黒い世界。
世界はこの２つの世界によって構成されている。
白の世界に生まれた魂は希望に溢れた魂。
黒の世界に生まれた魂は憎悪をもった魂。
魂はどちらかの世界に生まれ、
その世界で交鎖を求めて行く。

交鎖に辿り着いた魂は自分の生まれた世界には無い色を手に入れ、

この世に生まれる。

VOL.2　噂

抜けるような青空が広がっていた。

漂う白雲は空の青さを際立たせ、降り注ぐ光・・・

世界にはこんなにも鮮やかな世界があった。

スクランブル交差点の信号が赤から青に変わると同時に

レースマシンの如く勢いよく歩き始める人々。

そんな中、翠は世界の色に見とれていた。

「見た？ＲＢＢＳ」

（ＲＢＢＳは最近話題のネット上の噂掲示板だ。）

声優さながらのアニメ声に行き交う人々が振り返る。

アニメ声の持ち主は守屋定（もりやさだめ）である。

翠の幼馴染で翠の親友と呼べる存在だ。

彼は翠よりも頭１つ背が低く、

中学生でも通用しそうなほどの童顔だ。

最も精神年齢は年相応であり口もかなり達者で

「キミが女だったら・・・

だって幼馴染っていったら異性が定番だし

そこから始まるロマンスを期待していたボクとしてはキミの存在自体を否定したくなる」

などと真顔で言うような毒舌家(どくぜつか)である

「ＲＢＢＳになんか書き込みあったの？」

ココ３週間はテスト期間でＰＣや携帯をあまりイジってない。

もっとも噂大好きな彼は毎日のようにチェックしているだろう。

「嘘！？見てないの～

おれなんか毎日見てるよ～」

そういうことだ。

「で、何書いてあったの？？」

「それがさ、アダマス社がタイムスリップ出来る装置を開発してて

ついに完成させたらしいんだ。」

「嘘や～。絶対ガセやん。

だってアダマスっていったら世界的なファーストフード店だよ。」

「いや、確かめてみる価値あると思うな。ボクは。

という訳で今度の土曜１０時アダマス本店前集合ね。」

初めてアダマス本店が日本にあることを恨んだ。

定がこの手の話を持ち出したときは良いことが無い。

実際この前も大手デパートの地下に化学兵器開発室があると言う噂を聞いて

乗り込んだときは、地下はただの野菜などの保管庫で

帰る際に警備員に捕まって警察沙汰になった。

というわけで・・・

というわけにはいかず結局翠はアダマス本社の前にいた。

VOL．3　作戦

雪崩のように行き交う人々

その誰もがどこか切羽詰ったような表情をしている

世界にはこんなにも多くの人が居て、

自分はその中の１人でしかない。

そんな事を考えて溜息をついた。

また翠をこんな事を考えるまで待たせている彼も

その中の１人でしかない。

１０時２０分

翠が約束の時間を２０分過ぎても待ち続ける理由は１つ。

ここで帰ると待つ以上に面倒なことになるからだ。

彼は約束を破るとウルさい。

実際彼が悪いのだがこれも面倒なことになりそうなので言わない。

１０時３７分

３７分の遅刻で彼が来た。

「おし。行こう」

謝罪は？

そんな気持ちが目で通じたのか彼は口を開いた。

「ボクは忙しいんだよ。ｂｕｓｙなんだよ。

それでも来たんだよ。感謝してほしいくらいだ。分かる？」

「全然」

そんな会話もいつもどうりで何事もなく？アダマスに入った。

いつものようにとりあえずは一般客として入る。

２人ともホットドッグを購入し、テーブルについた。

定が紙とペンを出した。

彼は慣れた手つきで周りを見渡しながら

スラスラと書き始めた。

トイレ。事務。受付。出入り口。地下。

など様々な部屋を紙上に著した。

「オイ翠。警備や受付から死角になるココから天井に潜って

地下に行くんだ。」

ペン先がトイレの文字の上に置かれた。

「それから怪しそうな所を奥から順に探していく。

帰るときも来た道で行くんだ」

ペンはトイレから地下の入り組んだ道を進み、全ての部屋の前を通るルートで帰ってきた。

彼の言う死角は悲しいほどに正確だ。

いつも結局彼のおかげで捕まるのだが。

「ヨシ。行こう」

見ると彼はいつの間にかホットドッグを食べ終えていたので

翠は急いでホットドッグを食べ始めた

VOL．４　ネズミ未来系

空気が冷たい。

いや、熱い。

真上が冷凍庫だったり調理場だったりで温度差が激しい。

この天井薄すぎるんじゃないかと思うくらいだ。

だが彼は止まらない歩き続ける。

「ガサッ」

初めて彼の動きが止まった。

「なに今の音。」

「さぁ・・？ネズミでもいるんじゃない？」

「物音＝ネズミってそんなベタなコト・・」

「キュー」

ネズミだ。

でも何かが違う。

何だ。

明らかによく見るハムスターなどとは違う。

このネズミ、2本足で立ってる！

「定、最近のネズミって2足歩行するんだね」

「そうみたいだな。」

ネズミも進化したもんだ。

・・・いや無いだろ。

ありえんだろ。

それにネズミにしては頭大きかったし。

「定、行ってみよう」

ちょっと面白いことになりそうだ。

「よし」

まず一番奥の部屋に着いた。

鉄製のドアでいかにもな感じだ。

開けるか。

「チョット待て。

ジャジャーンW定ミラクルアイテム。聴診器〜。」

何で持ってる。

「コレをドアに当てれば・・・」

・・・

・・・

・・・

「うむぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃんって聞こえた」

ソレ入っていいのか？

怪しいぞ。

うみーーーーんでいいのに

あえてのうむぃぃぃぃんだよ。

危ない。

ココは引き返

「ガチャ」

おい。

人が心のなかでどんだけ考えたと思って。

「おっじゃまっしまーす」

元気いいな。おい。

「どう？なんかある」

タイムマシンなんてあるわけ

「みぃつけた」

は？

「絶対違うってソレ・・・・え　ぇ？」

ハハハ

ハハハハハハハ・・・爆

「コレ絶対そうだよね。

タイムマシンだよね（輝）」

眩しい。

視線が眩しい。

「いや、でもありえないでしょ」

「え～でもココに「あーーーーーー」てあるじゃん」

無い。

「翠クン。そうゆうの現実逃避っていうんじゃないですか？」

「でもタイムマシンって書いたシールなんて露骨な

それにそのシール貼ってなかったら

ただの日焼けマシーンだぞ」

「ハイハイまだ世の黒をしらない少年の夢を壊さないでくれるかな」

誰がだ。

「ということでポチッ」

うむぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃん

開いた。

日焼けマシーンの蓋あいた。

あれ？

この音さっきも。

！！

「定！誰かいる。」

「え？」

何処だ。

見つかったらヤバイ。

「見事です。流石です翠クン」

声は上からだった。

放送かと思ったが

上を向くと天井に男の人が張り付いていた。

Ｖｏｌ．５　Ｖｓ変態

男、、、

変態？

いかにもガン○ムに乗って「アム○行っきまーす」的なヤツがいる。

「おーい。翠クーン返事は～？」

テンションたけぇ、、、

「ハーイ！」↑ｂｙ定（輝）

コイツもか、、、

塚、ノリノリだな、オイ。

「君じゃない。黙れ」

そして冷たいな。

さっきのハイテンションなキャラ何処行ったんだ。

「翠クーン　おーい　へ・ん・じ」

「・・・」

「へ・ん・じ」

「・・・」

「返事しろやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「・・・」

「もう、、、定は暗いなー」

あ、オレ、コイツ苦手だ

「はい先生」↑ｂｙ定（輝）

「うるさい馬鹿」

表裏スゴイな、、

「ハイ質問」↑ｂｙ翠　挙手

「わーｗｗ

翠クンが喋ったぁ

なあにー？」

あーやっぱ無理だわ

「誰ですか」

「知りたいー？

ねぇ知りたいのー？

んーどうしよっかなー

教えてあげなーい」

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

「（超笑顔）殺すよ？」

「ワー殺されちゃうー」

翠の攻撃　睨む

変態に３のダメージ

変態の攻撃　「翠クン怖ーい」

翠に３００００ＧＢ（ギガバイト）のストレス

翠の攻撃　仁王像フェイス

変態は回復した　（何故だ）

変態の攻撃　「爆笑」

翠に４００００キロヘイホウメートルの精神的苦痛

翠の必殺技　「仲間を呼ぶ」

定が現れた

定の攻撃　「どくｚ「帰れ」」←変態ｓボイス

定は帰った

翠の裏必殺技　「甘える」

翠は反動で精神的苦痛を受けた

変態は１００００００萌のダメージ

変態は悶え倒れた。

□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇□◇

ハイ。

５話目終わりました。

なんかもう疲れました

塚、まだ変態は天井ですからね。

次話できっと降りるカモ、、、

乞うご期待です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1740d/

クロス

2010年12月19日05時37分発行